

シェパードイングのランゲージ

牧羊者と羊のためのパターンランゲージ

Neil B. Harrison
Lucent Technologies
11900 North Pecos st.
Denver, Colorado 80234
(303) 538-1541
nbharrison@lucent.com

訳：塚本 好広 (JPLoP LoS 翻訳グループ) Ver.0.9

私達の多くはライターズワークショップ(writers' workshop)やその他のレビューの前に、パターンを僚友に見せて意見を求めたことがあります。実際、PLoP の会合に提出されるパターンはいずれも、シェパードイング (shepherding) を受けてから採用を審査されます。あいにく、シェパードイングの質は相当まちまちです。かなり有益なコメントをもらう人もいれば、ぞんざいな所見と「良さそうですね」といって認定をもらうだけの人もいます。

しかし、シェパードイングはパターンを改善するうえで、かなり強力な道具となりえます。言葉使いのことで提案するばかりでなく、パターン記述の核心に触れることまで指導できる可能性があります。実際、シェパードイングによって解法についての論文をパターンに仕立てることができるものです。とはいえ、漫然と読む以上のことを要求されるのがシェパードです。要求されるのは、注意や行動であり、以降で述べるパターンに描かれるようなものです。

これらのパターンを学んだのは、牧羊者 (シェパード) と「羊 (作者)」、双方の立場で有意義なシェパードイングを行った経験からです。それを補う意見交換を経験したのは、パターン以外の技術的な作業、つまりは教育や立会からです。あなたがより良いシェパードとなるために、このパターンは役立つでしょう。正式なパターン指導の場面でも、それ以外の状況でも。

舞台設定

あなたが次の PLoP でシェパードとなることに同意した、としましょう。当然、あなたはシェパードイングについては多少の経験は積んでいて、少なくとも、あなた自身が「羊」役になったことがあります。それがどんな感じかをご存知。その上、パターンについてもご存知。良いパターンを仕上げるものについての理念もあります。理屈としては、あなたはライターズワークショップ(おそらくは PLoP の)に参加した経験がありますよね。

あなたが受けとったばかりのメールは議長からのもので、あなたをシェパードイングに任命したという知らせ。議長の書き添えによると残り一ヶ月足らずで最終版の提出期限ですから、すぐに始める必要がありますね。そこで、あなたは直ちに担当の論文に目を通します。それを読んでみて、自分の責任を理解しました - あなたの助力が採用の可否を分けそうです。ですから、できる限りのことを作者にしてあげたいのです。さて、どんなことを？

多分あなたはこれから述べるような幾つかの課題に直面することでしょう。当然、あなたはパターンに関する最新の文献に精通していますね。ですから、こうしたパターンを読んだことがあって、それらを適用して作者が作品を磨くことを手伝う準備もできていますね。

パターンの配置図

本稿に述べるパターンは二つの大きなカテゴリに分類できますが、そのカテゴリはお互いに深く関わり合うものです。第一のグループはシェファードイングのプロセス自身を扱うパターン、すなわちシェファードイングの戦術です。これらのパターンは、次の通りです(番号は本パターンランゲージでの通し番号です)：

1. 三度のくり返し(*Three Iterations*) :時間と労力をやりくりしてシェファードイングの効果をあげるには。
2. 牧羊者は羊を理解する(*The Shepherd Knows the Sheep*) :あなたと作者が実り多い間柄になるには。
3. 半分のパン(*Half a Loaf*) :シェファードイングを着実に進行していくには。
4. 展望(*Big Picture*) :パターンの要点を直ちに理解するには。
5. 作者が持ち主(*Author as Owner*) :パターンに手出しせず作者に執筆を任せるには。
8. 問題を定義するフォース(*Forces Define Problem*) :より深いレベルで問題を理解するには。

シェファードイングのプロセスは、要するにレビューのプロセスです。たとえば、ライターズワークショップもそうですね。ですから、これらのパターンが「ライターズワークショップのためのパターン言語」¹に深く関わっているからといって、驚くことはありません。そちらから選り抜いたパターンは概略付きで参照して、ライターズワークショップパターンとして示します。

シェファードイングとはまさにパターン自体を改善することなので、第二のグループに入るパターンは、パターン自体の諸相を扱います。こうしたものは厄介事になりやすいので、シェファードがしっかり見ておくべき領域ですし、改善の余地が大いにあります。興味深いことですが、本稿のパターンは簡単に二分できません。実際、次に挙げるパターンの筆頭は、前述の一覧にも出ていますね！ 言い替えると、自分自身の指導にあたるつもりで《展望》パターンを適用すると、無意識のうちにパターン自体を改善することにも役立ちます。その一方で、《展望》を適用してパターン記述の改善をはかると、あなた自身もシェファードとしての暮らしがより楽になります。本稿に挙げるパターンの多くについて、同様のことが多少なりとも成り立ちます。

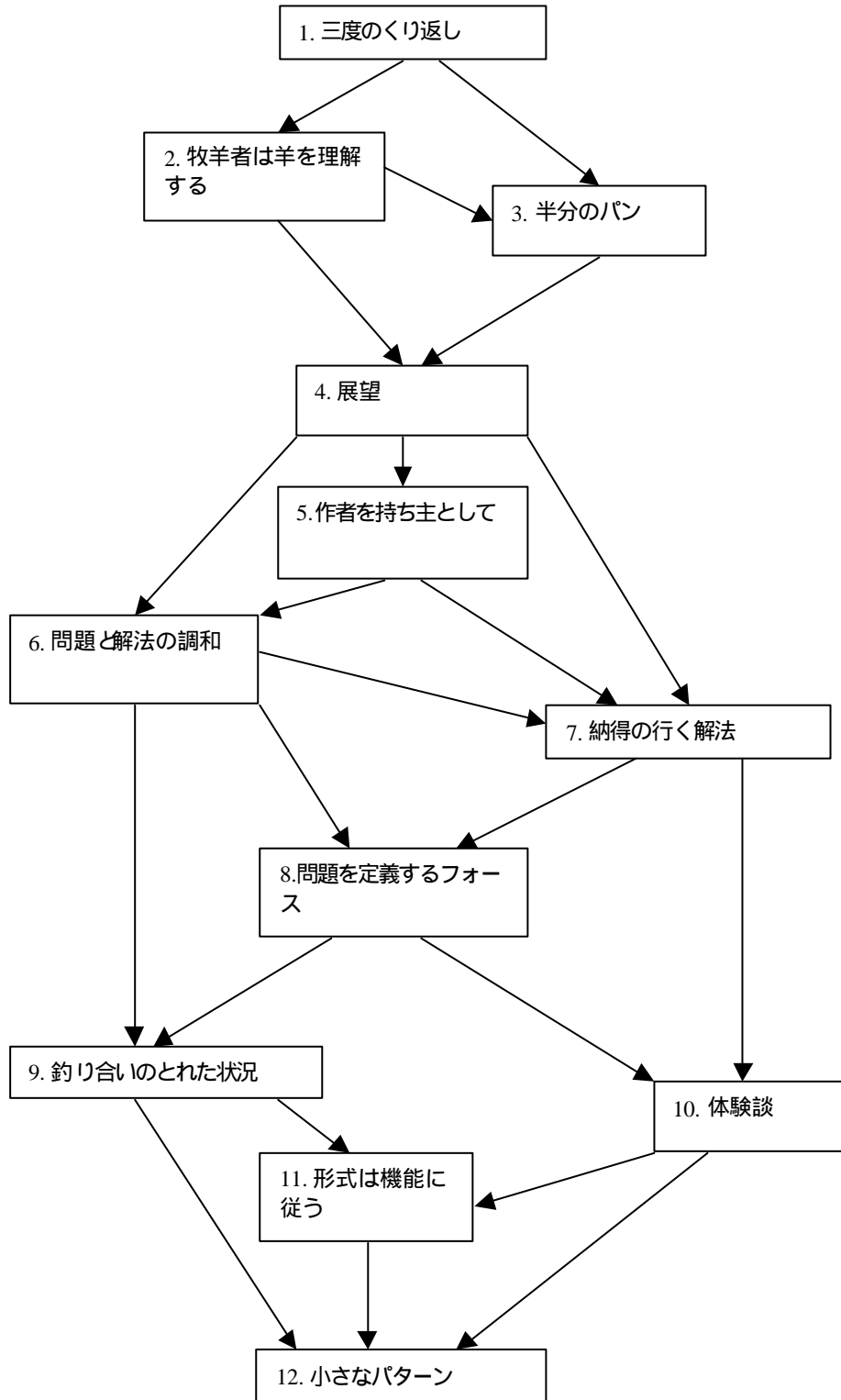
4. 展望(*Big Picture*) :パターンの要点を直ちに理解するには。
6. 問題と解法の調和(*Matching Problem and Solution*) :パターンをまさにパターンらしくするには。
7. 納得の行く解法(*Convincing Solution*) :パターンを信用できるものにするには。
8. 問題を定義するフォース(*Forces Define Problem*) :問題点を強調するには。
9. 釣り合いのとれた状況(*Balanced Context*) :適切な視野でパターンをとらえるようにしてあげるには。
10. 体験談(*War Stories*) :パターンの血行をほぐしてあげるには。
11. 形式は機能に従う(*Form Follows Function*) :パターンに新しい形式を与えるには。
12. 小さなパターン達(*Small Patterns*) :パターンを要約しやすい状態に保つには。

後者に分類されるパターンの方が、盛り沢山のようです。「パターンライティングのためのパターンランゲージ」²に関連するので、こちらは「パターンライティングパターン」として参照します。

¹ Coplien, James: "A Pattern Language for Writers' Workshops," in *Pattern Languages of Program Design-4*, Addison-Wesley, Reading MA, 1999, pages to be determined.

² Mezaros, Gerard, and James Doble: "A Pattern Language for Pattern Writing," in *Pattern Languages of Program Design-3*, Addison-Wesley, Reading MA, 1998, pages 529-574.

シェファードイングの過程において、はじめのうちは戦略的パターンのグループをより多く使いがちですが、そのうちに二つのグループを良く交えて使うようになります。ここに全てのパターンをまとめた図がありますが、これらパターンが大筋ではこういう順序で適用されるはず、というものを示しています。あるパターンから別のパターンに向かう矢印は、最初のパターンが次のものを利用するためにお膳立てをする、ということを示します。



パターン集 (The Patterns)

1. 三度のくり返し

あなたが指導にあたるパターンを受け取ったとき、先行きどれだけの作業量があるかはわかりませんね。パターン言語の成熟度や出来にはいろいろな水準があって、サイズについても、もちろん言うまでもありません。作業の量や種類は、ばらつきが大きくて予測しにくいものです。

作者があなたの知人であれば助かります。そのパターンから予想されるものに対して、より確かな見当がつくでしょう。しかし、同じ作者でも作品が変われば、シェファードに要する作業量は(ときにはまるで)違ってきます。

* * *

あまりにも多くの場合、作者がシェファードから受けるフィードバックは、お粗末なものです：土壇場になって届いたり不完全でうわべだけのものだったりします。作者は修正版をシェファードに送り返すどころか、シェファードの真意を知る機会を得ることさえできません！

実際、大抵のパターンで、シェファードの際にはそれ相当の手間が必要です。一つの理由は、シェファードがおそらく最初の「部外者」としてその作品をつぶさに吟味するはずだからです。つまりは、そのパターンと距離を置いた第三者が存在してこそ、本当の意味でパターンの長所・短所が明らかになるのですね。

大方のシェファードが最初のうちは最善を尽くすつもりなのです。とはいえ、シェファードはボランティア活動で、本業が行く手を阻みます。時は刻々と過ぎていって、そのうちすぐに、あなたにできることはパターンを斜め読みして作者宛のコメントを走り書きするのが関の山になります。あなたは少し気が咎めるものの、パターンがいっばしに見えることで気分を紛らわします。とかく、そうした慌ただし状況ではそうなりますよね...

ですから：

シェファードを計画する際に、シェファードから作者へのコメントが三度くり返されるようにしましょう。通例としてシェファードに割かれる期間内で三度のくり返しを遂げるには、ほとんど常にといいいいほどですが、すぐに取り掛かる必要があります。シェファードも作者も、即座に回答できるように備えておくべきです。シェファードは提案を作者に送る必要がありますし、作者は改訂に備える必要があるのですから。

三度のくり返しによってあなたは時間を計画的に配分できます、そうして得た時間で、十分に有意義なコメントを作者に寄せることができます。また、あなたが一切のコメントを締切三日前の作者に押しつけないように予防する働きもあります。作者は扱いやすい量の情報を得て、もっと上手に回答できます。「半分のパン」で、この点をより大きく扱います。

あなたが生まれつきのんびり屋だと、こうするのはすごく難しいでしょうね。やる気を出すには、すぐさま作者に対して各回のコメントを取りまとめる場合を告げましょう。相手に約束することは絶対の刺激になりますよ。

ものによっては二度のくり返しで足りるかもしれませんが、反対に他のものは三度を超えてコメントをとりまとめる必要があるかもしれませんね。一度や二度で記述の形が整えば、予定外に得られた時間を満喫することができます。ところが、三度のコメントで得をしない論文はめったにありません。むしろ、通例は論文について三度を越えて議論する必要

があります。スケジュールに議論をもう一度うまいこと追加できるようならば、気兼ねなくどうぞ。しかし、三度のくり返しが済んだら、その記述はシェファードにとっても新味が薄れがちです；あなたは「採炭切羽(=現場)に近付きすぎた」³ のですね、同様の提案を作者に繰り返している自分に気がきます。三度のくり返しが済むと、同じシェファードによる効力は弱まっていくようです。記述の具合によらず、三度目というのが議論を終える場合のようです。

大抵の場合、(三度のくり返しによって)シェファードに掛かる手間は増えます。ですが、シェファードの質は大いに向上します。シェファードとしては、そのつもりでいるべきです。覚えておきましょう、あなたが費やした時間は作者にとって値打ちものになるのです。

* * *

このパターンはシェファードにまつわるやり取りをお膳立てしますが、これだけでうまくいくものではありません。効果的な時間配分をするには情報の流れも考慮しないとイケませんが、それは《半分のパン》で実現することです。加えて、このパターンが前提としているのは、牧羊者(シェファード)と羊(作者)の息が合うことです。そうなれるように、《牧羊者は羊を理解する》を思い出しましょう。

Jim Coplien と Dirk Riehle に感謝します。

³ この英国風の比喩については、Alan O'Callaghan に感謝します。

2. 牧羊者は羊を理解する

いまやパターンを手にしてシェファードイングの準備も出来ましたね、最初に何をしましょう？ あなた方は《三度のくり返し》に合わせてスケジュールを立てたのですよね。とはいえ、羊（作者）があなたのコメントに注意を払う保証がどこにもないことは、ご承知ですよね。

* * *

シェファードは本質的に批評者です。ですから、牧羊者（シェファード）と羊（作者）の間には自然と障壁があります。つまり羊は傷付くことをおそれて身を守ろうとします。こうした姿勢では、効果的な意思疎通の妨げになるおそれがありますし、牧羊者のコメントをないがしろにする傾向すら、羊の心に芽生えてしまうかもしれません。

あなたはといえば、コメントをたくさん作者に寄せることで最大限の手助けをしたいと思うことでしょうかね。それなのに作者がそのコメントをあらかじめ無視したら、がっかりですね。それであなたは難しい事柄をごまかしてしまって、小手先の提案だけを寄せがちになるかも知れませんね、そうしたものは当たり障りがありませんから。

ほとんどのシェファードイングは電子メール越しで行われます。電子メールはシェファードイングをするためにはかなり理想に近いものの、拘束力がないし、人物像があまり伝わりません。そのせいでたやすく無視されてしまいます。

大体のシェファードは作者でもあるので、「私はシェファードにすばやく積極的に返答するつもりなので、私が指導にあたる作者もこまめに返事をくれるに違いありません」といった金科玉条に従うことはできるでしょう。しかし、実情としてはとりあえず；何の保証もありません。私達が他人を相手にしていて、そうである以上、その人達に対してなんの強制力も持っていませんよね。

ですから：

すぐさま作者との親交を結びはじめましょう、そして、シェファードイングが続くあいだはそれを維持しましょう 早速にでも作者と連絡をとるのですよ、たとえパターンを読む前でも、あなた自身について何かしらを作者に告げましょう あなたに期待できること（例えば三度のくり返し）を作者に告げて、その応答としてあなたが何を期待するかを明らかにするのです。何をあいても、約束を果たしましょう！

重要なのはシェファードイングに人間らしさを出すことです。作者に必要なのは、あなたを知っている、あなたを信頼できる、といった感覚なのです。作者の助けになるのは、あなた自身がかつては羊（作者）であったと知ることであり、羊がどんな経験をするかを知ることです。要するにあなたは、作者に対する「安全環境」⁴を築いているのです。

早いうちのふれあいは重要です。作者はあなたの世話役ぶりから活気づけられるでしょうし、あなたの連絡に期待を寄せるようになるでしょう。すぐに連絡を付ければ、あなたの気遣いを示せます。作者はあなたの助言を聴くことをより強く願うでしょうね。このことを言い得た昔の格言がありますよ、「人はあなたの理解度に気を遣わないもの、その人があなたの気遣いようを理解するまでは。」

あなた方はそうした人間らしい交友を時が経つにつれ育んでいけますが、それもコメントを寄せる際の態度によりけりです。改善の提案ばかりでなく、前向きな応援も忘れないようにしましょう 試しに{肯定的な反応を皮切りに}⁵して、それぞれの提案を{肯定的な結び}⁶で締め括ってみましょう

交友にとって重要な一面は相手の期待をお互いが理解しあうことです。あなたがしたいことや作者にしてもらいたいことを取り入れた前提を立てましょう。例えば、数日の旅行や行事の予定を網羅します、なにせ、その期間中は返事がすぐに出せませんからね。ついでに、電子メールのエチケットにまつわる好き嫌いも、あなた方にとって重要なものは挙げておいて良いでしょう

* * *

このようにすれば、シェファードも作者もその過程で啓発されるのです。あなた方はシェファードの後も続く関係を築くことでしょう、それはあなた方が「信頼の共同体」⁷を築くということです。ある機会に、とある作者と私とは、彼の論文について大々的に作業しました。続くPLoPのときに、私がフォークミュージックを愛好していることも作者は承知していて、フォークミュージックのCDを彼の故郷から贈って私をねぎらってくれました。

⁴ ライターズワークショップパターン「安全環境」: より率直で有効な反響を得るために(特に作者にとっての)快適さを高める方法。

⁵ ライターズワークショップパターン「肯定的な反応を皮切りに」: 集会を応援ムードにして、作者が受け入れられる反響で始める方法。

⁶ ライターズワークショップパターン「肯定的な結び」: 反響の総括が済んだ時点で、作者に前向きな気持ちでいてもらう方法。

⁷ ライターズワークショップパターン「信頼の共同体」: その体験が痛手ではなく、むしろ今後の糧である、と作者に感じてもらう方法。

3. 半分のパン

シェファードィングはもう始まっています。《三度のくり返し》を使って、あなた方は大体のスケジュールを固めましたね。それに、あなたと作者はお互いに何を期待するかも理解しましたね（牧羊者は羊を理解する）。となれば、もう作者はすぐにも最初のコメントをあなたから受け取ることができます。

* * *

作者を手助けしたいという熱意のあまり、しばしばシェファードィングはありったけの校正を作者に一挙に送りつけますが、これでは作者が参ってしまい、スケジュールが台無しになります。

作者にコメントの総覧をまとめて送りしたくなるのは、無理もないことです。ですが、細大漏らさずコメントしたうえで三度のくり返しを維持することは、まず無理ですよ。時間がまるで足りません。もし仮にあなたはコメントできたとしても、作者の応答が間に合いません。なにせ、改訂作業には批評よりもっと手間がかかるのですから！

校正がどれも同等というわけでもないでしょう。確かに重要なものもあれば、些細なものもあります。ですが、もし作者が全てのコメントをいっぺんに受け取ったら、どれが重要か判断に困ります。作者はあまり重要ではない変更で時間をとりすぎて、重要な変更にかかる時間が無くなるかもしれません。これは当然の成り行きですね。言葉使いや綴り方の修正は簡単ですし、私達は簡単なことから始めたがります。

ですから：

作者に寄せるコメントを小分けにしましょう。まずはいちばん重要なことから始めて、些細なことは徐々に出ししょう。コメントしたいことの総まとめが済んでいないうちに時間切れになったら、出来ている分を送るのです。あなたが送ったコメントがどんな有様でも、作者は着手できます。半分のパンでもないよりはましです。

コメントは、ソフトウェアと違って完成前でもリリースできますね。実際のところ、デバッグする必要だってありません！作者には意味が通じるでしょう。もし分からなければ、説明を求める電子メールがいくつか来ると思えば良いですよ。

スケジュールの方がコメントの完璧さよりも重要です。前者については、時期を外すとコメントのくり返し工程が危うくなって、中途半端になります。後者については、作者はあなたが送ったもので始めることができます。必要に応じて、コメントはいつでも仕上げられます、大方を送ってから何日が後でも構いません。

* * *

今やあなた方は出発進行、といったところでしょうか。まだ、頭の痛い問題が残ってましたね：いちばん重要なことから始めるのだとして、それが何なのかをどうやって把握しましょうか？どこから始めましょうか？その答えは《展望》の中に見つかりますよ。

David DeLano、Jutta Eckstein、そして Dirk Riehle に感謝します。

4. 展望

あなたは小出しのコメントを寄せる準備ができましたね（*半分のパン*を参照のこと）。ですから目の作業はといえばパターンを理解し、最も重要な点を最初に強調すべきものとして見抜くことです。とはいえ、それは口で言うほど簡単には出来ませんよね。

* * *

シェファードの糸口が掴みにくいことも割とよくあります。あなたがパターンを理解しないことには効果的な提案ができませんが、パターンの草案はとにかく理解しがたいものです。現段階で小さく簡潔なパターンはおおかたが材料不足です。反対に、大きなパターンはともすると無関係な詳細を含んでいて、そのせいで主題がぼやけがちです。

最初の一読で、草稿の至るところに改善すべきことが見つかります。しかし時間は限られています。そこで大切なのは、最初に最も重要な点を引き出して明らかにすることです。さらにいうと、重要でないことは変更されるかもしれませんし、あなたの方が大きなことに取り組んだ途端、自然と片付いてしまうことさえありえますからね。とはいえ、最も重要なものが常に明らかであるとは限りません。

パターンの草案は泥まみれということも希ではありません - パターンが一体どんな代物かさえはつきりしない程です。パターンが世に出るには激闘があったことでしょうか、発掘作業が必要なこともあります。遠慮なく言うと、技術屋さんの多くが物書きとしては拙いのですよね！

当然のことながら、シェファードがパターンを最初に見たときのことは、一般の人が体験することの写し絵です。第一印象は拭いがたいものです。そうするとパターンの出方次第で、何事にも雲泥の差がついてしまうかも知れませんね。

ですから：

手始めに問題と解法の記述を読むことで、主題を読み取りましょう。そして、問題と解法の記述に対する意見を最初に送りましょう。問題と解法だけあれば、パターンの展望は得られるはずですよ。

ここから始めるのには三つの理由があります：第一に、そこからすぐにパターンの趣向がわかりますし、そのパターンにこれからどう取り組んでいくか、という構想を練るためにも役立ちます。第二に、作者がパターンをどのように理解しているか（それとも理解していないか！）を知るためにも役立ちます。第三に、パターンの本質は、パターンそれ自体から容易に抜き出せないといけません。つまりは読者に、それが何についてのパターンが比較的容易に理解してもらえるものであるべきです。ちなみに、第一印象による意見を寄せるのにうってつけなのは、展望を読み取った直後ですよ。これは{レビュー直前の読解}⁸に通じるものがあります。

このような核心の情報に相応しい場所としては、問題と解法の節それぞれの冒頭があります。それぞれの節で冒頭の一、二センテンスを見てみましょう。パターンの基本的な考えは最初の一読で理解できるべきです。これは{一度で読めるパターン}⁹を連想させます。そうやっていかなかったら、作者に依頼できることは、パターンの全容をなるべく簡潔に説明すること、それに、その説明をパターンに組み込むことです。作者に「パトレット」形式を使ってもらい、しばらくはそのパトレットをもとに作業するのも良いでしょう。

⁸ ライターズワークショップパターン《レビュー直前の読解》：レビュー担当者がワークショップの準備を過不足ないものとする方法。

⁹ パターンライティングパターン《一度で読めるパターン》：パターンの要点を初見の読者にも容易に理解できるものとする方法。

注意点として、いくつかのパターンは(本稿もそうですが)「問題」や「解法」の節を明示していません。しかし、それに相当するものは容易に見つかります(「見つけやすい節」¹⁰を参照のこと)。本稿を例にとると、問題や解法はボールド体です。注意といえば、「問題」や「解法」というのは{不可欠な要素の提示}¹¹の鍵にあたる要素ですよ。

* * *

シェファードィングは《展望》を携えて始めたときのほうが効果を発揮しやすくなります。展望によって、シェファードと作者が同じ土俵に立てるようになります。時間のかかる誤解も避けることができますし、また、一番大切なことに最優先で目を向けるためにも役立ちます。(《問題と解法の調和》を参照のこと)。

論文の査読を目的とした興味深い類似のパターンとしては{論文を素早く評価する}¹²があって、これは Jens Parlsberg によるものです。

¹⁰ パターンライティングパターン 《見つけやすい節》 鍵になる情報を見つけやすくする方法。

¹¹ パターンライティングパターン 《不可欠な要素の提示》 確実に、必要な情報の全てを漏らさずパターンに提示する方法。

¹² 《論文を素早く評価する》 : コンファレンスや専門紙のための論文において利点とされる考えを素早く知る方法。
<http://c2.com/cgi/wiki?EvaluatePapersFast>を参照のこと。

5. 作者を持ち主として

シェファードは現在進行中です。あなたはパターンを読み終えましたし、おそらく最優先の論点を知る手助けとして《展望》を使っていることでしょう。今やあなたは、いつでも作者に最初のコメントを送ることができます。

* * *

作者としっかり結んだ絆のせいで、作者があなたの意見に頼りすぎるおそれも生じます。特に心配されるのは、作者が提案を丸写しするかもしれないことです。

作者があなたの言葉を忠実に採用してくれたら、まんざらでもない気がしますね。でも、結果的には望ましくありません。まず第一に、あなたは専門家でないので、コメントに正確さを欠くところがあるかもしれません。やはりシェファードではなく、作者が専門家のはずですよ。

第二の問題は、あなたもわずかばかりとはいえ記述を部分的に受け持ってしまうこと。通常それは不適切で、ほとんどのシェファードはそのような負担を望みません。

おそらく最も大きな問題は、あなたの提案をただ書き写したところで作者は何も学ばないこと。パターンの文面ばかりでなく技術的な論点にも取り組むことは、またとない上達への道です。作者にこの機会を失わせてはいけませんよ。

ですが、時間が圧してくると作者はコメントをパターンへ引き写すばかりになり、内容についてほとんど考えません。

ですから：

作者をその作品の紛れも無い持ち主としましょう。答を詰め入れず、むしろ作者に質問して、正しい方向へ注意を引くのです。あなたの意見の大部分を、示唆に富んだ質問でまとめてみましょう。

批評を質問形式にして作者から答えを引き出せるようにするのは、とかく難しいでしょうね。「何(What)」、「どのように(How)」、そして「なぜ(Why)」を考えましょう。例えば「何の問題を解決したのですか?」とか、「どのようにその解法は問題を解決しますか?」とか、「なぜこのフォースが重要なのですか?」などします。他の「w」で始まる報道関係者風の質問を使っても構いませんよ。例えば、「どんな場合(When)ではその解法が機能しませんか?」などします。

質問されると、作者は問題について考えるようになります。それで適切な表現(さらには構想!)に思い至るのであって、あなたの言葉を考えなしに引き写しはしません。ですから、作者は主題やパターン全般について学ぶことになります。あなたの方も、作品に隠れた見えざる手となるわけで、その作品に過度に巻き込まれずに済みますね。

* * *

断っておきますが、このアプローチをとるには作者にただ提案するよりも手が掛かります。シェファードとして、作者に質問する内容を良く考えないといけませんから。作者側の作業も増えますね。しかし、こうした時間と労力の割増は、パターンのまとまりや質が向上することで報われるものです。

質問形式をとると、副次的な効果もあります。それは、あなたのコメントがパターンを露骨に攻撃するものではなく、そのほうが、作者にあまり気まずい思いをさせずに済むでしょう。

6. 問題と解法の調和

いちど《展望》を携えて歩み出したからには、それについて何をすべきか知る必要があります。指導されるパターンのほとんどは、多少の手入れをして《展望》とつじつまを合わせる必要があります。

* * *

ややもすると未完成のパターンではつじつまがうまく合いません。解法」が「問題」を探し求めているように見えたり、あるいはパターンの意図さえも、はっきりしないことがあるかもしれません。

パターンには順序良く書かれていないものもあります。作者がパターンに触れて論じる流れにしても同様です。それで、パターンの「展望」(問題と解法)もあちこちに分けて書かれることが多いのです。しかし、読者は順序通りにパターンを読みます。このせいで展望はとかく曲解されたり、曖昧になったりします。

私達は解法に注目しがちです。確かにパターンは解法について記述するものですからね。こうした注目により解法はしっかりしますが、問題文はあと知恵になります。しかし、パターンの使いどころを知るためには、しっかりとした問題文が欠かせません。

やたら込み入ったパターンもありますが、そうしたものは当然ながら理解するのが難しいわけです。こうしたパターンはどうしても多くの詳細を含むものですが、そのせいでパターンの意味がぼけてしまうおそれがあります。これに拍車を掛けるのが次の事実です、つまり、主題に精通する作者は、いきおい細部に注目します。パターンの骨子については(作者にとっては)も自明ですから、ほとんど注意が払われません。まあ、読者にしてみれば明白ではありませんが。

ですから：

問題と解法を読み合わせて、それらが対応していることを確認しましょう。解法は、問題のすべてに対応しないといけませんが、問題になっていないことに及んでいてもいけないのです。二つの節のち割と弱いのはどちらなのかを明らかにして、弱いほうを強めましょう。普通は、まず解法にあたり、その後で問題にあたることになります。

これはまさにバランスです。問題と解法とは釣り合うべきで、その目標はパターンを十分なものに感じさせることです。一つの切り口として、パターンの広がりがあります。問題と解法とは同じ領域をカバーしているべきです。広範な問題には一般解が要ります。限定された問題は、それに特化した解法でカバーできます。別の見地として深さもあります。この見地からも、解法と問題とは釣り合うべきです。もし解法が一つの見地から掘り下げられていて、しかもそれが解法にとって適切であれば、問題の見地も、ことによっては状況の見地も、それに見合うべきです。(同様のことは問題での掘り下げにもいえます。まあ、実際には稀なことでしょう。)

現時点では、あなた方はパターン全体でいうと第一関門にいます。ですから、残りの節を読み飛ばして課題と解法を読むだけでも、まだ有益かもしれません。それはパターンに対するバランス感覚を磨くために役立つでしょう。しかし、そのうちフォース、状況、あるいは実現手段といったような、周辺の情報を持ち込む必要が生じてきます。その目的は、いくつかの抜け穴を塞ぐことです。

私達は解法についての経験をもとにパターンを書きますから、解法の記述を最優先しがちです。少なくとも、まず心に浮かぶものでしょう。解法は私達がパターンを書く動機なのです。だから通例、解法は問題よりもこなれています。それが、手始めに解法にあたる理由です。

* * *

ここで述べたパターンは、あなたにとってはあるパターンのどこに手入れが必要かを知るための手がかりになります。作者にとっても、解法と問題の相互作用を理解するための手がかりになります。しかし、わかるだけでは済まされず、具体的な行動を起こして解法と問題とを定式化しなくてはなりませんよね。次のステップとして《納得の行く解法》と《問題を定義するフォース》を見ていきましょう。

7. 納得の行く解法(「ああ、そうか」効果)

今や、パターンが形をなしつつあります。そこには確固たる《展望》があります。問題と解法の協調が始まっています(問題と解法の調和)。シェファードとして、あなたはこれら本稿のパターンを適用して作者を助けてきたことでしょう。ただ、多くのパターンはあなたが目にしたときから既にこうした特性をそなえています。うわべは、きちんとしたパターンであるかのようです。

しかし、パターンがどこか少しおかしい気がします。とりわけ、あなたはその解法を怪しみます;それが機能することが納得できないのです。おそらく問題点は、そのパターンに実証となるもの、そのパターンを首尾よく利用できた形跡が見当たらないことでしょう。それとも、パターンが「世界平和」症候群の兆候を示しているのかも知れませんか;そうした解法は「言うは易く行うは難し」といったところですよ。ときには、その解法が本当に間違っているように見えます。

* * *

ときには解法がまったくもって脆弱です;あなたにしてみれば何の役にも立ちません。

パターンにとって欠かせないものは、実証された知識です。しかし、ときおり作者は一過性の解をパターンのつもりで書き上げます。ごくまれに、思い描いただけの解法を書き上げたりもします;一度として実践したことのない解法です(「世界平和」症候群も、そんな感じがします)。ライターズワークショップの場では、私達は作者を信じようとします。そうなるたまさにシェファード次第ですよ、こうした事態を察知して後の困惑を避けられるかどうかの瀬戸際です。

作者はときにパターンが身近過ぎて、解法における重要ないくつかの面を自明なもの、それどころか些細なものさえ感じます。そのため、それらについて記述しません。しかし、そのせいでパターンの信憑性が危ぶまれます。さらにはパターンを「世界平和」めいた解法に見せてしまうのです、これはパターンを適用するために役立つ情報が抜けているせいです。すると私達も不安になりますよね、作者は実際にこのパターンを首尾よく使ったことがあるのかなあ、と。

「アンチパターン」に執心する人達もいます。これは一般的な問題を記述して、破壊的な行動をしないように助言するものです。ですが、その代わりにすべきことまでは教えてくれません。パターンたるものは、うまく行く物事についての情報や洞察を伝えるべきです。ほとんどの人が、へまをやらさず方法だったらもう尺山知っていますよね。

ですから:

強固で、否応もないほどの解法を探しましょう。理想的には、解法は「ああ、そうか」となる効果をもたらすべきですね。もしそうになっていなければ、率直に要求しましょう。ずばりと尋ねてこの効果を起こすのです。たとえば、その解法が機能するということが納得できないと作者に告げましょう;どうか私を納得させて下さい、と。それをどう実装するのか、あるいは、作者がそのパターンを実際にはどこで見つけたのか、などと尋ねてみましょう。

兆しを示すものに注意しましょう。たとえば、「should - すべきである;のはずだ」という言葉や、使用例がはっきりしないものがそうです。何れともあれ、自分自身の直感を信じましょう。話が出来すぎていて本当らしく聞こえないときには、たぶんその直感は正しいでしょう。

解法が一般的すぎると信憑性が薄れがちになります。作者を手伝いましょう、解法をもっと絞り込んで深みを増すため、使用例の特定を求めましょう。例外を示すことだってできますね、解空間を絞り込むために例外を締め出すのです。

* * *

こうしたやり口は作者に真っ向から挑戦することです。信頼の絆にひびが入る危険があります；これが、作者との信頼関係を確立しておくことが重要となる理由です(《牧羊者は羊を理解する》を参照のこと)。でも、尻込みはしないように。今のうち隠し立てせず怪しがおけば、作者だって後から際限のない紛争に巻き込まれずに済むわけですから。

解法が良い按配に仕上がってから(あくまでそれから)は、《問題を定義するフォース》へ課題を進めることができます。

8. 問題を定義するフォース

ふつう 作者と一緒に《納得の行く解法》に取り組んだ後は、パターンの解法については形が整うものです。ですが、そこは楽な部分です。パターンの出自はくり返し見られる解法ですから、仕掛けの中のパターンでいちばんはっきりしている箇所は解法です。しかし、解決される問題の本質とは何なのでしょう？

* * *

問題の記述が貧弱なパターンは数多く、問題が曖昧過ぎることもあります。解法についてはきちんとおさえていながら、他には何も無いようなものも相当あります。問題文の記述が一行も見当たらないことさえあります。

問題というのはパターンの手がかりなのです。解法がパターンの心だとすると、問題はパターンの精神です。問題文を丹念に記述すれば、その問題に対する解法を求めている人の助けになります。それなのに、多くの作者はこのことを理解せず、解法の方にばかり注目します。

問題文は難所です。私達は解決指向に傾きがちですね。いったん問題を解いてしまうと、それ以降は解法のことだけを考えます。それで通常は解法を書くことから始めて、それからあと知恵のように問題を記述します。これでは解法を前提にした問題文が導き出されます。極端な場合、問題文は解法の言い直しに過ぎないものです。

形式上は問題が最初に来るため、ときに作者は解法を記述する以前に問題を記述します。ですが、そのことも問題があります。衝動的に問題を書き下ろしてしまい、解法の理解が不十分な段階であってもお構いなしなので、作者が解法の細部に至るまで考え抜かないことには、問題文にしても曖昧で大雑把すぎるものとなりがちです。

問題というのは込み入ったものです。多くの側面が存在して、それぞれの手段で解決に向かうことを示唆するでしょう（機能するものばかりではないでしょうが）。その上、ともすると問題の見た目は問題それ自体とは違うものです。麻疹は体内の病気ですが、見た目は皮膚に浮き出た小さな赤斑です。

ですから：

問題文は目に見えてまずい事柄を表現すべきです。そうしたうえで、フォースによって読者は問題の本質や、兆候の背後にあるものへの洞察力を得るのです。作者はフォースと問題文の間を行き来しながらその双方を改善すべきです。

補足しておきますが、本稿でいう問題文は不十分にされがちな(目に見える)問題文のことであり、次の段落(フォース)に示されるものが、背景となる理由です。さらに注意して欲しいのは、この特殊な記述形式においてはフォースの名前が明示されていないことです。あなたも一介のシェファードであれば、パターンからフォースを探し出せるべきでしょう。

作者が問題についてはうまく切り出しているのにフォースが不十分ならば、問題を難しくしている要因を尋ねましょう。また、問題で述べている兆候の裏にある本当の問題は何かと尋ねましょう。しかし問題文は外見上の兆候についての絞りを絞っておきましょう。これこそが、読者が将来出会って、関係をたどることができるものなので、

フォースはあるのに問題の歯切れが悪ければ、作者に頼んで、問題を描写するフォースを一文に要約するところから始めてもらいましょう。もしそのパターンでフォースと問題の両方が不十分ならば、手始めにこんな質問をしましょう。「さて、どんな問題をあなたは解決しようとしているのでしょうか」とか、「一体全体何がまずくて、このパターンで解決すべきなのでしょうか？」と。

もしフォースがまるで見つけれなければ、{明白なフォース}¹³を適用してみましょう

質問めいた問題文には、ことのほか用心深くあたきましょう。それらは乱用されやすいものです。問題文が「あることをするにはどうしたらいいの？」といったように読めるのであれば、それはほとんど解法を前提にしています。フォースを読んで、その中に本当の問題が隠れていないか見極めましょう

* * *

あなたがシェファードニングに費やした労力は、あらかじめ問題に関するものであったと気がつくかもしれません。しかし、それで結構です。いったん問題と解法がさまになれば、そのパターンが露わになります。私はパターンと称するものを数多く見てきましたが、そこを抜け出ようともがいている真のパターンもありました。パターンは問題が具体化されるにつれ明白になっていきました。

¹³ パターンライティングパターン {明白なフォース} 解法の選択肢を読者に間違いなく理解させるには。

9. 釣り合いのとれた状況

パターンが《問題と解法の調和》、《納得の行く解法》、そして《問題を定義するフォース》を経て形を成してくるにつれ、パターンを使える場面と使えない場面とが、さらにはつきりしてきます。問題はきちんと理解されました。いまでは解法もより良く定義されましたね；その適用に対して自然な制約が付きまして。ただし、あまりに多くの場合、私達は解法の効果を考慮せず、これで問題解決、一件落着、と思ひ込みます。しかし、そうした思ひ込みは実にあどけなさ過ぎます。申し分ない見事な解法を適用すること、そうしたことも合わせて、どんな活動も結果を伴います。パターンには利用者に対して結果を明らかにする義務があります。

* * *

パターンが「そうして人々はいつまでも幸せに暮らしました」症候群に罹っていますね；このパターンを使えば、世界中が良くなるでしょうと、それとも「あなたの病に効く薬」症候群に罹っているのかも；このパターンならば、あなたの身に起こるすべての問題に使えますよ、と。あるいは、その両方を併発しています。

こうした二つの症候群は、実際には同じ問題です；パターンの状況がきちんと述べられていません。前者は、パターンを適用する状況が不十分だったり大まか過ぎたりするのでしょう。後者は、帰結やパターンの適用によって起こる状況を度外視しています。両方とも、とりわけ作者からは忘れられがちです。作者はパターンとそれほど身近なのです。

ほとんどの場合、パターンはあらゆる事、あらゆる人に試みられます。作者には周りの人から、パターンをこうすれば、様々なことに使えるはずです、とのコメントを寄せられます。そうして作者は、パターンを拡張して新しい領域をカバーできるように試みるのですね、それでパターンが膨らんで、焦点を見失いがちになります。

パターンが適用されるべき場所が揺らいでしまうと、パターンを適用すると一体どうなるかも揺らいでいきます。主な原因の一つは、パターンがもたらす結果はとかく、あと知恵のように最後に付け足されるせいです。それは、論戦の興奮を軽視することになるでしょう。

ですから：

解法の使用前、使用後の状況に注目して、パターンを適用したことで世界がどう変化するかを見ましよう。発端と結果についてそれぞれの状況を比較しましよう。さらに、発端となった状況を問題と比較して、結果として生じる状況を解法と比較しましよう。

発端となった状況は基礎を築き、来るべきもの、すなわち問題、のお膳立てをするものです。結果として生じる状況は、解法の適用によって世界がどう変化したかを説明すべきです。そして最終的な状況は、フォースがどのように釣り合いをとっているかを示すべきです。

発端と結果の状況を比較しましよう。各々の一覧を挙げることができますよね、ですから結果が発端の状況をもれなく始末しているかどうかわかります。過度にばら色の結果となるような状況記述は、たいがい具体性がやけに乏しくて、状況がどう変化したか、とか、フォースがどう釣り合いを取っているか、といったことを明かしません。ですから、一覧をあなた方の道案内にしましよう。それには作者に、各々のフォースの向きがどうなっているかを尋ねるのです。具体的なことや実例を要求しましよう。《体験談》が役に立つかもしれません。

状況の記述は手に余るものですね、そのため往々にして、あまり厳密な状況を述べることは不可能であったり現実的でなかったりします。ですから、パターンの作者にはつらくあたりすぎないようにしましょう。ただし、明らかにならずきには注意しましょう。発端の状況があまりにも大雑把だった、結末の状況があまりにも楽天的だった、引き締めにかからないといけません。

* * *

これはパターンが歯切れ良さを保つのに役立ちます。他にも役立つことがあります、パターンは要点に的を絞り続け、ずっと使いやすいものになります。利用者は何を期待できるかさらに深く理解するでしょうし、大げさな期待を寄せて盛り上がった挙句に失望することもなくなるでしょう。

10. 体験談

今やパターンは見事に改善されていることでしょう。問題と解法とが明らかで、パターンをどこに適用するかが理解できるようになっているでしょう。しかし、まだです。それでもそのパターンは理解しづらいのです。さらには、おそらくそのせいで、そのパターンは退屈なのです。

* * *

パターンが明快でなかったり、実がなかったりして、あなたがどんなに提案しても、一向に良いほうに向きません。

パターンの作者はしばしばパターンについて、あれこれ追加要求に直面します。その意図は、より広範に適用できるように、もっと使いやすく、など様々です。ですが、もし作者が何から何まで追加していくと、しまいには、ばかでかくて、不恰好で、そして鈍重なものになります。そのうえパターンは、大きくなるにつれてますます抽象的になり、近寄りにくくなってきます。とはいえ、要求される情報は重要です。

作者はパターンと非常に身近で、しかもそれを直に経験していますね。ですから、そのパターンは作者にしてみればまったく自明なものです。ですが、多くの読者はそうではありませんよね。なかでも、作者には文章化していない知識があって、それをわかりきったことと感じていますが、外部の人にはそうではありません。ときには抜けが多すぎるあまり、シェファードはパターンが明解でないと知りながら、必要最低限の明解さを得るために何を尋ねたらよいかさえ、想像がつかなくなったりもします。

ですから：

作者に実生活での経験(「体験談」)を話してもらいましょう、その目的はパターンを明解にすることです。

体験談は、そのパターンが一体何であり、どのように使えるか、ということを見せつける極めて強力な手段になりえます。

体験談を使うひとつのやり方は、それを{稼動実績}¹⁴とすることです。

体験談の重要な側面は、それが対象とする読者にふさわしい、ということです。《対象読者を明らかにする》¹⁵ を参照すると役に立ちますよ。

当を得た物語を作者から引き出すひとつのやり方は、そのパターンがどのように生まれたかを尋ねることです。ある回の EuroPLoP で二人組の助言にあたりましたが、そのパターンはまったく理解しがたいものでした。しばらく討論した後、私は彼らに、どうやってそのパターンを見つけたか語るように頼みました。彼らはすぐさま晴れやかになって、パターンを使う様子について元気よく語りました。その途端にパターンの意味が理解できたので、私に語ったことを書き下ろすように進言しました。そのパターンの改善は劇的でしたよ。

* * *

¹⁴ パターンライティングパターン {稼動実績} 読者がパターンを使いやすいように多数のパターンを通じた一例を挙げる方法。

¹⁵ パターンライティングパターン {対象読者を明らかにする} 主な対象となる聞き手をはっきり確認することで、確実に聴衆の心にパターンを届ける方法。

体験談はパターンを実に生き生きとさせます。それは原理を説明してパターンの信憑性を強めるばかりか、パターンをいっそう興味深いものにさえます。代償といえばパターンがより長くなることですね。ですから一つのパターンに二つ以上の物語、特に稼働実績を入れることは行き過ぎに思えます。

個人的な経験を公開することをためらいがちな文化もあるので注意しましょう。そうした状況にあると、このパターンは適切ではないかもしれません。

11. 形式は機能に従う

(もしくは、機能的な形式、似合いの形式)

《問題を定義するフォース》や《釣り合いのとれた状況》のようなパターンを適用すると、しばしばパターンに大きな付け足しがあります。それらが元からあったものとうまく調和しないことがあります。おまけに、パターンの多くの節で、中身が少し不自然に見えることがあります。こうしたことが早いうちにはっきりしていることもあるでしょうが、それがようやく目立ってくるのは、《問題と解法の釣り合い》、フォース、あるいは状況とったものに取り組んでからのはずです。

* * *

時には、そのパターンに作者が選んだ記述形式がまったく調和しません。。

作者によっては限られたパターンにしか触れていなくて、一つ二つのパターン形式しか知らないかもしれません。例えば、多くの人が最初に対面するパターンは GoF 本(デザインパターン：オブジェクト指向ソフトウェアデザインの基礎)ですが、そこで使われる記述形式は PLoPD(Pattern Languages of Program Design)で使われている多くの記述形式とは異なっています。あなたにしても自分が知っている形式には愛着があるでしょう

しかしながら、パターンによってはある記述形式が別のものよりずっとうまく機能します。作者にしても形式を替えたほうがずっと容易に時を過ごせるかもしれません。私は一連のパターンを特別な記述形式で書いたことがありますよ。私は記述と奮闘しましたが、ついには別の形式を使って出直しました。すると、パターンはまるでひとりで書かれているかのようでした。

しかし、形式の変更は重大です。作者はそうした大きな変更を(当然ながら)したがりません、パターンを書き直す時間がほとんどないときは特にそうです。川を渡っている途中で馬を乗り換えるのは困難ですよ。

ですから：

パターンにあった記述形式を見つけましょう。そして、節を一つずつその形式に流し込みましょう

作者に何らかの情報を提供してもらって、適切な名前を付けた節を独立させるとうまくいきそうですね、と提案しましょう。たとえば、対象とするパターンの形式で個々に問題の記述があるならば、冒頭で述べるべき問題を抜き出して「問題」という見出しで引き立たせるように提案しましょう。いくつかの節は取り除くことができます、削除したり、他とまとめるように提案するわけです。

目標は、もちろん形式がパターンに奉仕することで、その逆ではありません。あなたが望ましい形式を徐々に紹介していくうちに、作者はその新しい形式がいかに便利か理解していくでしょう

* * *

もちろん、他のパターンも全てそうですが、本パターンは作者に特定の形式で記述することを強制しません。やはりそれは作者が決めることです。それでも最低限、作者は新しい記述形式に触れることにはなりますね。

このパターンは、続く《小さなパターン》と寄り添うようにして機能しますからね。

12. 小さなパターン

(もしくは：小さいことは美しい)

今までのパターンほぼ全ての主眼は、パターンの中身を増して明解にすることです。これはパターンへの材料追加を意味しています。そうすると、時にはかなり具たくさんになるかもしれません。

* * *

パターンを改訂していくと、特に(シェファードのような)他者からの入力がある場合は、当然とそれは巨獣に成長していくこととなります。

パターンが十分な情報を持つことも使い勝手のために肝心です。しかしながら、パターンが余りにも大きくなりすぎたら、読者は途方にくれます。簡潔さは分別の精神です。

作者がパターンに追加するにつれ、新しい情報がパターンの元の部分とかなり重複してくるでしょう。ただ、そのことが当初は明白ではないかもしれません。それに、作者は、当然なことですが、どこも取り去ろうとはしません。結局、作者はこうした理由からあらゆることを書いてしまいます。

パターンを小ぶりに保てるように絶えず刈り取りの努力をしよう、という考えもあるでしょう。とはいえ、パターンに必要な情報がはっきりするのは、往々にして作業がだいぶ進んでからですよ。ですが、その頃になると作者はもうそれ以上パターンを変更するのを嫌がりますよ、削除を伴う場合は特にです。

ですから：

まずはパターンが大きくなるのを許して、しかる後にパターンを切り詰めましょう。パターンに無関係な断片を見分け、それらを削除しましょう。

パターンの文章を引き締めることも通常は可能でしょうが、とはいえ校訂ではほんのわずかしが減量できません。必要なのはパターンの不要な部分をすべて探し、それらを取り除くことです。要らなそうな各々の節で、それがパターンに何を足しているか、そしてどこか他で補われてはいないかと尋ねていきましょう。こうすれば、作者にもパターンのどこを削除すべきかがはっきりしてきます。このパターンはしばしば、《形式は機能に従う》と一緒に使われます。

ハイパーテキストの支援により、詳細を初読では隠しておいて、必要に応じて呼び出すことができます。

パターンが非常に大きいなら、実際には複数のパターンなのかもしれません。作者に、そのパターンを複数の小さなパターンに分解することを考慮するよう提案すべきでしょう。サインとして目立つものはパターンが複数の解法を含む場合です；パターンは問題の一つ、状況の一つ、そして解法の一つ含むべきです。

* * *

本パターンを適用した結果として、パターンは前より小さくすっきりしますが、それでも大方の場合、シェファードリングを始めたときよりは大きくなっています。通常は何の問題もありません；もしそれがまずければ、何度もパターンを直すことができます。削除は困難な作業かもしれませんが、ソースコードを削るより文章を削るほうがまだ簡単です。

パトレットの候補生たち

幸いにも、パターンコミュニティには多くの経験豊富なシェファードがいます。そこで私は PLoP'99 コンファレンスのシェファードを務めた皆に調査して、シェファードিংでの経験を尋ねてみました。その回答はおおむね前節までに述べたパターン群を支持・発展させてくれるものでしたし、さらに幾つかの新パターンも提案されました。次に挙げるパターンの由来はそこにあります；発案者の名前は各々の末尾に、私個人の意見はイタリック体で入れます。

ここは仕掛かり中なのです。ここに示した候補パターンについても、あるいは新パターンでも、どうかご意見のほどを。よろしく願いますね。

パトレットに引かれて意見交換

パターンのサイズが非調和、規格外、ぶざま。

でしたら、それらパターンのパトレットを作者に書いてもらいましょう。そしてまずは、それらパトレットに着目して議論を進めましょう。

(これは大事です、でも《展望》の一部に過ぎないでしょうか？)(Ward Cunningham)

細かい話は先送りにできる

パターン記述にうんざりするほど課題が山積みで、文法、綴り、文章の構成、他にもいろいろ。

でしたら、そういうのは終わり際まで放っておきましょう、どんなに邪魔でも。全店改装する時って、壁紙や装飾のことは終わり際まで放っておきますよね、そうじゃないと、装飾のつけ外しに明け暮れることになります。

(このお題はちゃんとしたパターンに格上げするべきかも知れません。)(David DeLano, William Opdyke)

判定は保留して

記述の出来が最悪。

でしたら、まずシェファードিংをしましょう；シェファードিংと判定作業とは別物としましょう。採択できるかどうかの判定には、途中のじゃなく最後の記述を読みましょう

(シェファードিংと判定とを区別することはとても重要です。ですが、これはパターンといえるでしょうか？ もしそうならば、このパターン言語のどこに置けばしっくりくるでしょう？)(David DeLano)

形式はパターンを語る

記述がパターンでなくて、別のコンファレンスではじかれた論文の焼き直し。

でしたら、著者に掛け合って、それをパターン記述の形式に当てはめてもらいましょう(それから《判定は保留して》へと移行して...) (William Opdyke)

(これは《形式は機能に従う》の一部、あるいは《問題と解法の調和》の一部なのでしょう。これだと順序が逆の気がしますが。記述にパターンらしさを備えるべきです、たぶん《問題と解法の調和》が使えますよ、その後で形式を気にかけましょう。このお題にはちょっと賛成できません。)

分野の専門家をシェフアーダに

パターンの内容がまるでチンプンカンプン。

でしたら、知っている分野のパターンを選ぶことです。(これは、プログラム委員会がシェフアーダが自分の担当を選ぶことを認めていたらの話ですが。)

(このパターンはとても重要だと思えます。でも本稿のパターンランゲージにはしっくりこないようですね、関連の深い他のパターンランゲージに入るでしょうか。)(Antonio Rito Silva, Jim Coplien, Linda Rising)

一般的なバリエーション:英語も一つの専門分野です。英語を母国語としない著者による記述の場合、英語が母国語、あるいは非常に堪能な人による指導はご利益があります。(Andreas Ruping, William Opdyke)

この世での居場所

関係するパターンについて言及していません。

でしたら、そのパターンは、(特定の)既製品とどう関係しているのかを著者に問きましょう。むしろ、ある特定の既製品とどう違うのか問きましょう。これが特に効果的なのは、パターンが既存パターンのささいな変形版に見える場合です。

(問題がすり替わっているかも。問題はそれが既存パターンのささいな変形に過ぎないってことじゃないでしょうか。ですから違いを問うのです。これって当たり前過ぎます? そうかも知れませんが、でも何度かこれを使ったことがありますよ。)(Mark Bradac, Linda Rising)

連帯自己批判 (理髪師同士の散髪)

委員会が書いたパターン記述がとっちらかっています。

でしたら、それぞれの著者に掛け合って、「記述のバランスをとる」ためにパターン記述を通し読みしてもらいましょう。それにより、シェフアーダであるあなたがその作業まで丸抱えせずに済みますし、また、特定の著者ばかりを不用意にひいきしてしまうことも防げます。(床屋に行くときは、最低な髪型をした理髪師を選ぶのですよ。理髪師たちはお互いを散髪し合ってる、ということをお考えに入れておきましょう。)(Linda Rising.)

折り込みコメント

どうしても作者に趣旨を理解してもらえないこともあります。

でしたら、パターンの原文にコメントを割り込ませましょう。そうすれば、作者はあなたの意図をきちんと理解できます。(これはパターンでしょうか、あるいは単なる規則でしょうか? 前の版ではランゲージの本体にあったものを、ちょっとつまみ出したのですが。)(Neil Harrison 他)

結び

見た目には、本稿のパターンはあくまでもパターン記述を向上するための補助です。そうでしょう、まさしくそうしたものではありません。ですが、それより深いものです。ほとんどの節で、本稿のパターンはとにかく作品を良いものにする事柄を示しています。例えば、「体験談」はまさに一層の具体性と親しみをパターンに生じさせるものです。「問題と解法の調和」によってシェファードは、さらには作者も、パターンの本質に注目できるようになります - 解そのものについて、あるいはそれがどんな問題を解決するかについてですよ。パターンの多くが「課題」に関する記述の向上を求めます。「解法」がパターンの心であるならば、「問題」こそはその「精神」でしょう。私の経験上、問題文が写しにすることがほとんどで、そのため前述したパターンによる影響は直に、対象とするパターンの質に及びます。

ですが、さらに深い境地へと踏み入ることができます。本稿のパターンによって、私達はより一層効果的に課題を解決できるようになるのです ;それらは私達に問題への接し方を手ほどきします ;それらは私達に熟慮の機会をくれます。例えば、「展望」や「問題と解法の調和」の手を借りることで、私達は適切なスタートを切ることができます。私はいくつかの会合で、友人であり僚友でもある Jim Coplien が「ちょっと待った。一体、何を解決しようとしているの?」と尋ねるシーンに出くわしてきました。こうした問い掛けによって、私達は自分達が本当は何をしようとしているか着目できるようになります。それに、不毛な行きからも引き戻してもらえます。そんなふうにして、本稿のパターンすべてが私達の役に立ちます。それはシェファードに限りなく、問題解決の全般においても、そして他者との人間関係においても役立つものです。

謝辞

ときおり私は思うのですが、謝辞は先頭にあるべきなのではないでしょうか、そうしたら親愛なる読者であるあなた方に、この素材に誰が貢献してくれたか、読み出してすぐに判ってもらえるでしょう。そして実に多くの人の協力がありました。感謝の意を Jim Coplien に送ります、本稿の初稿を読んで、考えさせられるコメントを寄せてくれましたね。本当に Ward Cunningham には感謝しています、誰もが尻込みしてしまいそうな大役、シェファードに関する論文へのシェファード (!!) を引き受けてくれましたね。彼はまた、あまたのシェファード達からコメントを乞うようにも助言してくれました、そのシェファード達は Brad Appleton、Mark Bradac、Ward Cunningham (再登場)、Dennis DeBruler、David DeLano、Jutta Eckstein、Robert Hanmer、William Opdyke、Dirk Riehle、Antonio Rito Silva、それに Andreas Ruping。皆、本パターンをととても豊かにしてくれましたね。それから、PLoP99 のライターズワークショップに同席して見識あふれる指摘をくれたグループメンバ各位にも感謝しています。その各位は Brad Appleton、Ali Arsanjani、Ralph Cabrera、Ralph Johnson、John Liebenau、Cameron Smith、Carol Stimmel、それに Fujino Terunobu。

翻訳者あとがき

まずは何をおいても、翻訳を快諾して下さった原著者の Neil さんには心から感謝しています。その誠実なお人柄は言葉の壁を越えて、原文からもはっきりと伝わってきました。

長谷川さん、今回の翻訳作業にお招き頂いたこと、それと、何かにつけて妙な理屈をこねる私を見捨てずにいて下さったこと、本当にありがとうございます。藤野さんには、今回の協働作業を幾度となく空中分解の危機から救って頂きましたね。友野さん、平川さん、本当にお待たせしました。どうにかここまで漕ぎ着けました。それから金澤さん、ご多忙のなか査読をお願いしてしまっておめんなさい。コメントのメールは、とても励みになりました。

パターン翻訳という作業自体が私にとっとはまったくの初経験で、しかも素材がこれほどの「優れもの」とくれば、プレッシャーも大きかったものの、裏返せば大変に光栄なことでもありました。今回の件に懲りず、また他の「優れもの」も訳す機会があると嬉しいな、などと思っております。皆様方、その節にはよろしくお祈りしますね、何卒。

塚本 好広